

## 随想

### 小夜の中山

式 正英

2006年11月1日に浅井辰郎先生がお亡くなりなされたお知らせを頂いたのはその年末も押し迫った頃であった。密葬で全て済まされてしまった御様子だったので、弔意を示すにもすべがなく、折をみて墓参させて頂くしかなさろうかと考えて来た。浅井先生が入院中と伺ったのは、2006年1月お子様方から頂いた年賀状だったが、文中に気力、体力回復中とも書かれていたので、ついうっかり安心して日を過ごし、お見舞いが後回しになってしまっていたのだった。

その2年前の2004年4月に78歳で逝去されたお茶の水女子大学の元教室助手貝山久子さんの1周忌にあたる2005年4月頃、貝山さんの御遺族からその盛大な御葬儀の模様を伝える組み写真と故人の温容をまとめたパンフが送られて来たことを思い出した。パンフの説明によると葬儀に参加出来なかった浅井辰郎先生から、多額の弔意金を頂き、先生のお薦めがあってパンフが作成され会葬者に配られることになったと書かれていた。日頃から浅井先生が如何されておられるか気掛かりであったが、色々と気を配られる程にお元気な様子を知って一先ず安堵を覚えた。その2005年の夏頃に足の手術を受けられた由を上記の年賀状で後から知ったのだが、これらの事柄が連続的に起きていた訳だったのかと今頃気が付いた。

お知らせを頂いて後2006年は直ぐに暮れ、慌しく2007年の新年を迎えたものの、暖冬と云われながら2、3月になってから寒さが

結構続いて、旅行に出る好機を捕え難かった。桜の季節を迎える4月になってから、いつも行っている伊豆長岡の千歳荘をベースに2泊して中の日をフルに使い、浅井家の菩提寺である金谷の金性寺を訪ねてみる計画を立てた。4月9～11日になってやっと実行できる状況になった。

4月10日の宿の朝食を7時半からの早目の組に入れて貰ってすませ、伊豆長岡8時35分発の電車に乗れたので、9時三島発の新幹線「こだま」に間に合い静岡に向った。天気は好く車窓から富士山が眺められた。静岡で新幹線を下車、9時30分発の普通電車浜松行きに乗り換えて西に向い金谷に着いたのは10時丁度位だった。金谷の街は東海道沿いに北東-南西に細長く発達した街村の典型である。昔からの東海道の宿場集落であり、対岸東側の島田宿への渡河地点だった交通の要衝であり、JR駅はその西端にある。金谷は大井川鉄道の起点でもあるから、これ迄何回も金谷で乗り換えて大井川の奥の方へ行った経験はあったが、金谷の駅で降りて街の方へ向ったことはなかった。新幹線から外れている所為もあろうか、駅から街並みに向う路は人通りも車も少なく閑散とした感じであった。

金性寺は少し歩いて左手の山側、やや段数の多い階段の上にあった。寺院の建物の前で呼ばわってみても、人気を感じられなかったが、ややあって返事が返ってきた。年嵩の大柄の僧侶が出て来たので、来意を告げると、

「辰郎さんですね」と帳面を見て確かめながら先に立って歩き出し、寺の背後の斜面にある墓地へと案内して下さった。坂道を上って直ぐ左側に目的の浅井家の墓があった。上の段丘に至るまでの間の斜面が墓地になっている様であったが、明るくて陽あたりの良い風の吹き抜ける乾燥した場所であった。墓地より上の方はこの辺り特有の緑の茶畑が広がっていたが、車道もある様子で折々車が横切るのが眺められた。斜面にある縦型の灰色の墓石に「浅井家累代之墓」とあったので直ぐ判った。住職は何やら短い経文を唱え、気を利かせた様子で足早に去って行った。斜面の下に立って拝むと、墓石の頂部が人の丈の2、3倍の位置にそそり立って見える。墓の右肩に添う様に新しい木の卒塔婆が一基、新仏の埋葬を示して高く建てられていた。「南無阿弥陀仏為高德院辰誉研学寿永居士」と先生の戒名が書かれてあった。一對の生花を供え、持参したお線香に火を点けて御冥福をお祈りする。折しも風が吹きわたって静かな時間が流れて行く。墓石の裏に廻るとお父上の浅井治平氏が昭和10年代に建てられたと記されていた。治平先生も地理学者で筆者も電話で一度だけお話し頂いたことを想い起した。

お参りを終えてお寺に挨拶に寄ると、住職が「時間があるのでしたら、一寸お上がり下さい」と云われるので、遠慮しながら靴を脱ぐと本堂の奥の間へと導かれた。「最近位牌堂を修復したので御覧下さい」と云われる俣に壁面を仰ぐと、一番高い位置の真ん中に、一番幅の広い浅井家累代の御位牌が据えられていた。浅井家は金谷の金性寺の檀家の中心的家柄なのだろうと察した次第である。住職が再び短い経文を称えられたので、それに合わせて頭を垂れた。厳粛な気分を頂いたお礼に幾許かの喜捨を捧げることにした。住職によるとこの寺には専任の僧侶は数年前からいないので、隣の菊川町の応声教院が住職を兼任しているとの事であった。金性寺は今

は無住であり、僧侶が通勤して来ているのだと言われる。応声教院も金性寺も同じく浄土宗の寺である。菊川町は今は菊川市に、金谷町は今は対岸の島田市に合併しているが、お寺の繋がりから云って、こうした行政界は不自然に感じられる。

墓参を終えて駅の方に戻ろうとしたが、この西に蟠る「佐夜の中山」がどうしても気掛かりだった。金谷と西の掛川との間には、近世の東海道の三大難所と言われていた「佐夜の中山」がある。箱根峠と鈴鹿峠にならぶ難所とされながら、新幹線の車窓を飛び過ぎる景色の印象からは実体がはっきりと掴めない。偶々通りかかったタクシーに、取り敢えず「日坂まで行ってくれないか」と聞いてみた。「観光ですか」と多少訝しげであったが、他の予約をキャンセルした様子で付き合ってくれることになった。鉄道のガードを潜って直ぐ登り坂になりくねくねした曲り路になったが、路傍には必ず人家が見られた。牧の原の広大な茶園に接するかと思いきや、何かローカルな感じのトンネルを通過して菊川の上流の開けた谷合いに出た。運転手が気を利かせて「夜泣き石を見て行きますか。水飴の店もありますよ」と声が掛った。西に向うトンネルの手前に停車すると左手に「元祖名物子育飴」と大きな字で看板を掲げた飴屋が2軒だけ建っている。「その裏手の階段上の公園に夜泣石がありますよ」の声に促されて、急いで階段を上る。結構距離を感じたが、夜泣石は丸い大型の石で屋根に覆われて鎮座していた。傍らの説明板に「夜泣石の伝説」が書かれていた。

旧東海道の山頂にあった久延寺の観音様に安産のお参りに来た臨月の婦人が、夕方寺近くの帰り道、路傍にあった丸い石にもたれて休んでいた時、急に現れた山賊に刀で斬り殺されると云う騒ぎが起きた。その刃先が丸石に当たって止まり、切り口からは無事赤ん坊が生まれ出る仕儀となった。その時婦人の魂は

丸い石に乗移り助けを求めて泣いたと言う。寺の和尚がその声を聞きつけて、寺から西に下りて赤ん坊を見つけた時は虫の息だったが、寺に連れ帰り育てることにした。母乳の代わりに、水飴を作って大事に育てたところ、幸い肥立ち良く成長し、音八と名づけられた。寺から出て後に仇討ちにまで漕ぎつけたと言う話しである。旧東海道の淋しく険しい峠道の情景を表す物語りで、明治13年金谷～日坂間の5kmの間日本初の有科道路が設けられたとも説明されていた。

これで麓の二軒の子育飴の売店の存在する意味もはっきりとしたが、その一つの元祖小泉屋に入って水飴を買いもとめた。麦芽を使って精製したもので中々の美味だが、買う瞬間にはやはり自然に幼い孫娘に食べさせたらさぞ喜ぶだろうと言う想いが頭を過ぎった。人情の機微を捉えて昔語りが息づいていると実感できる。車道はトンネルを再び通って新緑に包まれた狭い谷の側壁に付けられており、タクシーはその俣駈け下りたので、程なくして日坂の集落に出た。もともとの東海道は谷の南東側の山稜頂を辿って付けられているので、谷沿いの路より100m程も高い位置を通っている。見晴らしも良く、衛生的でもあったのだろう。この路に沿っては新茶屋とか沓掛等の街道ゆかりの地名も付いている。地図には大字名「佐夜鹿」とありドライバーもそう呼んでいたが、何とも床しい響きの音である。日坂も山中の集落とは言え、家々が塊状にかたまるのではなく、ゆったりと間を開けて散開し東西の長さは700mにも及んでいる。旧陣屋跡は小学校の校庭になっていた。ここでタクシーを降りたが、金谷からの運賃は2,210円程だった。

日坂宿の初見は鎌倉時代の文書、延慶3(1310)年のものに見られ、徳川時代に入った慶長6(1601)年、東海道53次の内、品川宿から数えて25番目の宿として整備されることになり、周辺の助郷43村の協力を得て、

伝馬100匹、伝馬人100人が置かれた。天保14(1843)年の記録によると戸数168、人口750、本陣1、脇本陣1、旅籠屋33軒の規模があり、かなりの賑わいのあったことを窺わせる。日坂は山の中の宿場の所為か往時の面影が比較的良く保存されていて、江戸期の文化を回想し易いように思われる。多くの家々には池田屋、萬屋、川坂屋等昔の旅籠の看板が掲げられており、文化財として見学できるものもあり、旅館や料理屋になっているものもありで、それだけでも興趣の尽きぬ集落である。火災に遭った経歴もあって、火伏せの秋葉山信仰を刻んだ石灯籠の常夜灯があったり、高札場が街外れに遺されていた。境の川に架かる古宮橋の木の欄干にも意匠が凝らされていた。歴史的景観保存の政策に沿って復原が進められた結果かとも思えた。

折角の場所でじっくり時間を取りたいとも思ったが、一方簡単に昼食を摂ろうとしたものの、それらしい店、食堂やコンビニ等が見当たらない。ずっと西の方、掛川市街まで出ねば駄目かなと思いながら街を離れた。橋を渡って車道を横切った山蔭にやや規模の大きな神社があった。石の鳥居に事任八幡宮と扁額が掲げてある。コトノママハチマンと読ませる様であるが、説明板の御由緒によると創立は不詳だが、大同2(807)年、坂上田村麻呂東征の折に、勅命により現社地に遷座した由、延喜式神名帳に佐野郡、己等乃麻知神社とあるのはこの社であり、枕草子にも記載があるとあった。中世の武家社会に入って八幡信仰を採り入れて八幡宮を称したが、終戦後、古代の名を復活して事任八幡宮とした由である。

社殿は一段高い位置にあるが、境内には大木が2本ある。一つは社殿の前方にあるクスノキで高さ31m、目通り6m、根回り19.3mの堂々としたもので、掛川市指定文化財になっている。もう一つは社殿の東にある御神木のスギで、スッキリと直立し、樹齡は

1000年を越えると言う。傍の社務所に寄って縁起書をお願いすると、渡して下さった婦人が、「お茶でも一杯如何」と言われて、先に立って案内の姿勢である。社務所の裏から登った所に神主さんの自宅がありそこに招じ入れられた。「バスの出るまで休んで行きなさい」と言う御親切からであった。玄関の間には足置き付きの革張りのソファーが幾つも円いテーブルを囲み、かなり豪華な設えである。手前の手入れの行き届いた苔庭を通して門から外の、南の方、眼下に広く水田が広がる雄大な風景が見られた。遠江国一ノ宮の社格と江戸期の朱印高百石に相応する貫禄を感じとることができた。見渡せる田圃はかつての神社領を意味していた。隣の部屋から紫の袴姿の宮司誉田秀之氏が姿を現され、慇懃な御挨拶を賜った。行きずり客への丁寧な扱いに感動しバス停に戻った。

日坂から掛川駅へのバスは日に数本しかない様だが、乗ったら30分程で終点の駅前に到着した。新幹線の停まる駅前には意外に閑散として食堂を探しあぐねる事になり、北の方へ街中まで進んでやっと中華そば屋を見付け、昼食にあり付けた。碁盤目状の市街地だが掛川城趾の麓を通る旧国道の付近が街の中心であり、南の駅周辺の方が相対的に新開地で、商店数が少ない。東から西に流れる逆川の橋の所から仰ぐと、少し高みに天守閣と太鼓櫓の二つが見えた。こじんまりと慎ましかである。安政の大地震(1854年)で倒壊した天守閣を平成5(1993)年、青森ヒバ材を用いて忠実に復原した貴重な建築物である。太鼓櫓は古い建物だが現在の位置に落ち着くまでに4回も移築されている由である。山内一豊が在城したのは天正18(1590)年から慶長5(1600)年迄の10年間に過ぎなかったが、慶長元(1596)年に天守閣が初めて築造された。城主は何代も代ったが、掛川城には山内家のカラーが今尚色濃く残されている。敷地の中に張られたテントの屋根にも山内家の紋章が

染抜かれていた。城郭内の本丸の小丘上に天守閣が建てられているので、3層楼4階としては結構高く感ぜられる。天守閣は内部に木の香の漂うような新しい分厚い木材がふんだんに使われ、豪快な気分させられる。板の表面はよく磨かれていて気持が良いが、極急な階段には何度もヒヤリと感じた。眺望は絶佳であり、南の方には掛川市街やJR駅を越えて小笠山丘陵の稜線が見え、東北東には小夜の中山の丘陵の山並みの中に、粟ヶ岳の際立つ山姿が眺められた。粟ヶ岳の斜面には大きな「茶」の字に植え込んだ茶畑が東の方からは眺められて、静岡茶のシンボルを示す謂わば故郷の山である。東寄りの二の丸には藩の政務を司って来た御殿の建物が残されている。床面積が300坪程の大きな平屋建てで同じく安政地震で倒壊したが、時の城主太田氏によって直ちに再建された。御殿そのものは初めから江戸後期の建物である。二の丸には他に茶室や近代的な美術館があった。

東隣りには茂みと古い建物が見られたので、誘われるように廻りこんで入り口迄行くと、ちょっとした階段上に石門があり、左手に堅固な洋風建造物があつて「淡山翁記念報徳図書館」と書かれた白い石板が高く掲げられている。右手には奥まった位置に「大日本報徳社」本殿と思われる重厚な御殿風の建物が見られた。そこの門柱の向って右側に「道德門」左側に「経済門」と堂々とした文字が刻まれている。これは何かと思ひ当るまで数刻を要したが、幕末から明治に至る間、二宮尊徳の唱えた「報徳思想」と深く関わる施設に違いないと考え及んだ。

尊徳の少年時代の薪を背負いながら熱心に本を読む姿の銅像や石像は、かつては全国の小学校の校庭でお馴染みのものであり、出生地の小田原周辺とか栃木県等で農村の復興の為に活躍された尊徳の業績は余りに大きい。小田原城趾の一角には二宮神社があり、祭神として祀られている等も知ってはいたが、掛川

に報徳思想を広める運動の拠点があったことを、此処に来て初めて気付いた訳である。

掛川市倉真、昔の倉真村出身の岡田佐平治と子息の良一郎は尊徳から直接教えを受けた弟子であったのである。彼らは故郷に戻って掛川藩内の困窮した農村の救済に努力を傾注した。岡田良一郎は大正4(1915)年に没したが、その功績を讃える13回忌の記念事業として、上記図書館が昭和2(1927)年に建設された。この図書館の洋風の建物はその後掛川町立図書館となり、現在は掛川市立中央図書館の管理下にあつて、県の文化財にもなっている。淡山翁は良一郎の雅号であり、故郷の粟ヶ岳(淡ヶ岳)からその名を採った。

城下町掛川の実情に触れたのも初めてであったが、地域の文化中心として様々の面で重要な役割を果して来ていることを改めて認識することが出来た。金谷から小夜の中山を通過して掛川に出た数時間の旅であったが、これ迄意識して来なかった多くのものに接して収穫は頗る多かった。金谷と掛川との間に

挟まれてJR菊川駅があり、その菊川市の街に全国高校野球大会で最近名高い常葉菊川(常葉学園菊川高校)が所在することを実感したのも、この旅の御蔭である。

尚小夜の中山は佐夜の中山とも書かれるが、この付近の郡名である佐野郡から「さや」と読み「さよ」と転訛して、その音に字を当てたとする説があり、受け取り易い様に思われる。狭い谷を「さや」と言うことから来たとの説もある。中山は街道筋にある峠の様な高みに古くから一般的に使われている地理的名称と思うが、金谷と掛川の間に蟠る丘陵型低山地の一带は、正に「峠」と呼ぶより「中山」と呼ぶのが相応しい。「小夜の中山」の地名は噛みしめる程に味のしみ出る様な思いを誘う処である。

---

しき・まさひで

お茶の水女子大学 名誉教授